

附子は薬の効きをよくする

——附子の相乗作用仮説——

佐藤 田實

木町さとうクリニック，宮城，〒980-0801 仙台市青葉区木町通1-8-15 木町通TMビル3F

A Proposal on the Synergistic Effect of Aconiti Tuber

Tanomi SATOH

Kimachi Satoh Clinic, 1-8-15 Kimachi-dori, Aoba-ku, Sendai-shi, Miyagi 980-0801, Japan

Abstract

When a Kampo formula does not have a strong enough effect, combining it with a small dose of Aconiti Tuber (hereinafter AT) considerably enhances the effect.

Case 1 : Xiao-chai-hu-tang-he-Dang-gui-shao-yao-san had been prescribed to a 22-year-old female patient for discoid lupus erythematosus. Upon combining 1 g of AT with the Xiao-chai-hu-tang-he-Dang-gui-shao-yao-san, her erythema disappeared in 6 weeks. Case 2 : Dang-gui-shao-yao-san + Bu-zhong-yi-qi-tang had been prescribed to a 25-year-old female for acne vulgaris. Upon combining 1 g of AT with the Dang-gui-shao-yao-san + Bu-zhong-yi-qi-tang, her acne healed in 8 weeks. Case 3 : Bu-zhong-yi-qi-tang had been prescribed to a 44-year-old male for fatigue and slight fever of unknown cause. Upon combining 2 g of AT with the Bu-zhong-yi-qi-tang his suffering was relieved in 6 weeks.

This enhancement might occur as a result of a synergistic effect. To verify this, the author collected the formulas to which AT had successfully been added, as detailed in patients' charts and Kampo classics, and then analyzed them by means of Kampo diagnosis and etiology.

The analysis showed that AT was utilized nonselectively for various symptoms. A small amount of AT manifests no potency of its own but enhances the potency of the coexisting ingredients, so its use may be appropriate for a variety of symptoms.

In conclusion, AT has two modes of action. In smaller doses, as is the case elucidated above, it enhances the effects of Kampo formulas. In intermediate or larger doses, as Si-ni-tang, it acts as a heat-medicine.

Key words : Aconiti Tuber, synergistic effect

要旨

治療に際し処方効きが鈍いとき、少量の附子を加えると効果を著しく高めた。これは附子と薬との相乗効果の結果と見た。その解明のため自験例と古典の記載を分析し考察を加えた。第1例は22歳女性の紅斑性狼瘡で小柴胡湯合当帰芍薬散に附子1gを追加し6週間で紅斑が消えた。第2例は25歳女性のニキビで当帰芍薬散+補中益気湯に附子末1gを追加して8週間でニキビが治った。第3例は44歳男性で慢性微熱に補中益気湯に附子末2gを加えて6週間で治癒した。

附子はどんな症状に効果的なのか。3症例には冷えは認めずむしろ熱のある例も含まれた。また症状はまちまちで一定の傾向がなかった。そこで症例を増せば大凡の傾向が出るものか、古典の附子加味の例を集め分析した。すると症状は陰陽虚実、気血水で見ても、自験例と同様に、様々であった。

この結果を説明するに、多様な症状に応じ附子に各の効能を想定すると、多数の効能が必要となりそれは不自然である。そこで附子は、分量が少なくそれ自体の効果は少ないが、組む相手薬の効能を高めると仮定すると、説明し易いことを示した。

以上の議論を集約し、附子の働きには薬への感受性を高める間接効果即ち相乗効果と、四逆湯のような熱薬としての直接効果との、2通りの様式があることを述べた。

最後に附子加味の臨床に有用な事柄を古典をもとに纏めた。

キーワード : 附子、相乗効果、補中益気湯加附子

緒言

治療に際し効きが今一つ手ぬるいというときに附子を加味したところ、薬方の切れ味が鋭くなった。これは附子と他薬との間に相乗効果が働き効果が高まったと考えた。しかるに近年この現象は論じられた様子がない。そこで症例を報告するとともに相乗効果も併せて論じ附子の臨床に寄与することが本論の目的である。

議論の順序は、先ず経験した附子加味の3症例を呈示する。次に古典の附子加味の例を集めて表に纏め、症状と薬方の大凡の傾向を窺う。この傾向は附子に相乗効果を仮定すると説明が容易になること、また附子の働きには相異なる2様式があることを議論する。最後に今後の臨床に有用な事項を纏めた。

症例

症例1 紅斑性狼瘡 (DLE) 女性22歳 無職

〔既往〕小児喘息を患った。高1倦怠を伴い生理出血が止まらず膠原病を疑われた。高卒後精神分裂病に罹った。

〔現病〕19歳より顔面に紅斑が出没する。

〔現症〕皮疹は、両側の頬から顎や耳介に、鮮紅色丘疹、暗赤紫色結節、環状紅斑が散在する。数週間隔で出没を繰り返す。悪化すると皮疹は熱を帯びる。身長173cm、体重83kg。大柄色白。脈沈細数。腹柔らか。軽い右胸脇苦満と軽い右腸骨窩に圧痛を認める。平素足腰が冷えがちという。血圧114 - 50mmHg。

〔経過〕抗精神病薬療法は継続し、平成9年12月から漢方治療を行った。皮疹の様子が霜焼けを連想させ当帰芍薬散加呉茱萸生姜湯を選んだ。すると紅斑は2週間後には一旦退色したが、4週間後には逆戻り悪化した。当帰芍薬散でも同じ経過を示した。10年2月より煎薬にかえ桂枝茯苓丸加味方などを試みて無効に終わった。同年秋再び当帰芍薬散に戻し3カ月続けると紅斑が少し和らいだ。11年3月胸脇苦満を考慮し小柴胡湯合当帰芍薬散として、紅斑が縮小して熱も引いた。その後同年夏の一時的増悪の後には膠着状態が続いた。同年11月老人の褥瘡に十全大補湯を用いたおり、附子を加味してすぐに治った経験を思いだし、附子0.5gを加えてみた。2週間後には一段と改善し、1gに増し1カ月後には顔面の皮疹は全て消えた。

症例2 ニキビ 女性 25歳 事務員

〔既往〕小学校時代に過敏性大腸炎。高校以降は生

理痛で苦しんだ。

〔現病〕19歳からニキビがでた。排卵期と生理前に悪くなる。

〔現症〕1mm大の小丘疹で中央が尖って化膿するものが両頬から顎に集簇する。身長161cm、体重47kg。脈緩。歯圧痕。腹直筋緊張。臍上動悸。小腹と臍下に強い圧痛。便秘3日1回。血圧98 - 48mmHg。生理は不順。

〔経過〕平成11年8月より、清上防風湯7.5g+ヨクイニンエキス6g+大黃末を6カ月間用い、さして改善しなかった。その後起床時の不機嫌と日中の易疲労傾向が出現しこれには補中益気湯が著効した。12年7月に至り再びニキビの治療を求めたので、同湯に上乘せして当帰芍薬散7.5g+ヨクイニンエキス4.5g+大黃末0.6gを1カ月続けた。今度は頬の方はほぼよくなったが、顎には生理前になると数mmの大きいものがボツボツとでた。そこで前方に附子末1gを加えた。徐々に改善して2カ月後にはニキビが全部消え若い女性らしい肌になった。

症例3 男性 44歳 自営 原因不詳の遷延熱

〔既往〕小児喘息。

〔現病〕平成10年の冬40℃の高熱を発して以後、微熱が2年にわたって続き、身体がだるく、集中力も回復しない。頭がクラクラする。時に胃がもたれ、胸焼けがする。

〔現症〕身長161cm、体重62kg。脈沈数。舌が乾き赤い。腹は弾力がある。右胸脇苦満を認める。便秘1日1~2回。体温37.5℃。血圧126 - 92mmHg。体は顔から足先まで触れると熱い。手掌煩熱を訴え口唇乾燥を認めた。

〔経過〕平成12年4月倦怠を目標に補中益気湯を1カ月用いて無効であった。次に煩熱とみて三物黄湯、黄連解毒湯、柴朴湯、白虎加人参湯、五苓散などを1~2月単位で用い、どれも反応しなかった。この間春が過ぎて秋に至り熱感が多少和らぎ、体温は37.2℃であった。集中力低下と倦怠は依然続いた。後に引用の津田玄仙を参考に、以前無効だった補中益気湯7.5gに附子末1gを加えてみた。3週間後には37.0~36.8℃に下がった。附子末を2gに増やし更に3週間後には36.6℃に回復した。集中力が戻り熱感も消えた。口渇は改善しなかった。

〈症例のまとめ〉

第1例は煎薬治療で附子は石灰で加熱減毒したも

表1 古典に見る附子加味の薬方と症状

薬方	症状	引用古典
六君子湯	小児慢驚風	百々漢陰：梧竹楼方函口訣 ²⁾
十全大補湯	癰疽の潰膿後	百々漢陰：梧竹楼方函口訣 ³⁾
十全大補湯	産後出血の震え、虚弱者の腹痛 瘡瘍の起発しないもの	浅井貞庵：方彙口訣 ⁴⁾
清熱補氣湯	口舌糜爛	王肯堂：証治準繩 ⁵⁾
防己茯苓湯	腹水・腹張・腹皮かさつき	浅田宗伯：勿誤藥室方函口訣 ⁶⁾
補中益氣湯	傷寒後再発時の痛みと沈困無力	曲直瀬道三：医療衆方規矩 ¹⁾
補中益氣湯	内傷病で蒸熱と口渴のあるもの	津田玄仙：療治茶談 ⁷⁾
補中益氣湯	虚勞雜証・諸痔脱肛で疲れ多く 熱物を好み口渴するもの	浅田宗伯：勿誤藥室方函口訣 ⁸⁾
越婢加朮湯	脚気痿弱	浅田宗伯：勿誤藥室方函口訣 ⁹⁾
葛根加朮湯	発斑・頭瘡・腦漏	尾台榕堂：類聚方広義 ¹⁰⁾
桂枝茯苓丸、 桃核承氣湯	瘀血流注の甚しきもの	浅田宗伯：勿誤藥室方函口訣 ¹¹⁾
桃核承氣湯	血滯腰痛及月信痛	浅田宗伯：勿誤藥室方函口訣 ¹²⁾

の、他の症例ではエキス剤と湿熱処理した附子末を用いた。附子の分量は0.5g～1.0gで有効であった。

附子を加えるに先立ち冷えについて注意深く四診を行った。第1例は初診時足腰が冷えがちと述べたが、他覚的に冷たくはなかった。附子が効いて後、身体が温まった様子もなかった。第2例では問うても冷えを否定し他覚的にも温かい。裏寒を思わせる症状もなかった。第3例は足先から頭に至るまで触れると熱く、就眠時は熱くて布団をはいだ。咽が渴き冷水をよく飲んだ。

以上冷えない例また熱のある例にも敢えて附子を加えた。

考察

附子の加味が効果的であった3症例を報告した。附子はどんな症状に有効か。紅斑性狼瘡、ニキビ、微熱・倦怠と内容はまちまちで一定の傾向が見て取れない。症例を増せば何か傾向が現れるものか、今後の症例集積を待たねばならない。

〈古典でも症状は多様〉

ただ古典から附子加味の例を集めたら大凡の傾向は窺えるかも知れない。そこで手元の古典から拾ってみた。但し厥冷・疼痛・悪寒への附子の効能は『傷寒論』に知る所であるから、これら症状のものは除外した。つまり附子剤はもちろん附子加味を記した人參湯の例、また記述はなくとも大建中湯や当帰四

逆加呉茱萸生姜湯などで冷えや疼痛に用いた例も除いた。

かくしていかなる症状にまたいかなる薬方に附子を加えたか記載例を表1に纏めた。表の上段は症状及び用いた薬方から虚証と見てよい。薬方は今日なお頻用の補剤が専らである。下段の症状は薬方も併せ考え実証と見る。全体として虚証が多いが実証もある。このことは大塚敬節¹³⁾の見解とも符合する。氏は従来の「附子は実証に用いてはならぬ、虚証に用うべきだ」との説に対し、「元來附子は陰証に用うべきもので、実証でも虚証でも陰証ならばともに用いてよい」と訂正した。これは附子の通説といえよう。

陰陽については、例えば蒸熱や口渴の補中益氣湯の例は、著者も経験したが、津田玄仙⁷⁾は「白虎湯の煩渴に甚だまぎれ易し」といい、浅田宗伯⁶⁾は「少陽柴胡の部位にて内傷をかねるもの」という。つまり陽証と見るようだ。すると附子は陰証に用いるとする通説との関係をどう扱うか。ここには陰陽錯雜や潜在的陰証を考える立場もあり得る。また症例3については陽証説も捨て難い。表下段の症状も事態は似ている。やはり附子と陰陽のことは今後議論すべき課題であると思う。

気血水で見てもいずれをも含んでおり、やはり症状は様々である。概ねは慢性病であるが急性熱病後

のものが少数ある。

以上古典の附子加味例を並べて分析したが、自験例と同様、症状は多様という結果である。

〈附子の相乗効果〉

ではこの結果に対しその際の附子の効能をどう説明するか。思うに、附子の効能は古来よりその適応症状を用い即ち厥冷、疼痛、悪寒を治すと表記してきた。しかるに治療で抱いた薬の効きをよくするとの思いに立ち帰ると、症状よりはむしろ他薬との関係を問いたい。附子が多様な症状に有効であるときに、個々の症状ごとに附子に効能を認めると、多数の効能が必要になってしまい、それは不自然である。そこで附子は分量が少なくそれ自体の効果は現れないが、他薬の効果をも高めるよう働くものと仮定する。すると附子は組み合う相手との相乗作用を通して多様な効果を持つことになり、様々の症状に効くことが説明しやすくなる。

〈古典に類似説あり〉

薬の相互作用は古代すでに考えていた。岡西為人¹⁴によると、漢代の本草書の薬用総論には薬物の配合には相須相使のものを用いるなど記したことが推知できるという。明の李時珍¹⁵は『本草綱目』の附子・發明に元の震亨（朱丹溪）を引き「氣虚し熱甚しき者、宜しく少しく附子を用ひ以て参耆を行らすべし」と記した。これは少量の附子を加え人参黄耆の効能を高めるとの意味であろう。また明の虞搏¹⁶の引経説を引用し、附子は補氣、補血、發散、温暖の薬を各の作用点へ引き各の効能を現す旨書いた。これも附子と他薬の関係を見ると相乗作用説と類似する。津田玄仙¹⁶は補中益氣湯加附子と題した中で、附子はたとえば四逆湯では熱薬となり、補中益氣湯では人参黄耆の薬氣に力をそえると説いた。「薬氣に力をそえる」とは薬効を高めることに他ならない。国や時代もまた理論も異なるが、ともにこの現象に目を向けたのは確かである。今日薬理学で検証できないものか興味は湧く。

〈附子効能に2様式あり〉

以上症例呈示以降の議論をここで整理する。附子の効果には相異なる2通りの様式がある。温熱や鎮痛作用は附子の直接効果による。四逆湯、附子湯などの場合である。これに対し本論に説いた薬効を高める作用は間接的効果即ち相乗効果による。両様式

は一緒に働くこともある。相乗効果は附子が少量でも効果を示す。以下湯本求真¹⁷の新陳代謝沈衰説に触発され推測する。相乗効果を媒介するのは生体の諸機能であり、附子はこの諸機能を鼓舞し薬への感受性を高める。

〈附子の臨床に向けて〉

自験例に附子を用いた当時は、附子は冷えを確認して用いる習慣で、冷えないときましてや熱のあるときには抵抗を覚えた。このように冷えに囚われると附子加味が不可欠の機会を見逃しかねない。またもし奏功しても冷えが潜在したと思えば、冷えの無い例、熱のある例、水毒や瘀血にさえ試みることもないと思え及ばない。本論はこの囚われ克服のためにも書いた。

最後に、附子有効例の予測であるが、著者は薬方の効きが鈍いとき、証は合っているのに効き目がでないときに試みた。しかしこれのみでは予測が粗く的中率もよくない。そこで臨床に役立つような事柄を古典をもとに纏めた。

(イ) 虚証なら症状と病因とを選ばず試みる。特に補中益氣湯、十全大補湯など参耆剤を用い効果不足のときや効果が見えないとき、他の薬方を探す前に一度試みてよい。

(ロ) 熱や口渴には補中益氣湯加附子とする。白虎湯に紛れることがある。津田玄仙^{17,18}、浅田宗伯¹⁸を参考にする。熱はないが口渴を目標に用い諸症に奏功した大塚敬節¹⁸の例もある。

(ハ) 頭瘡や蓄膿症に葛根湯を用い発表段階を経過した後、化膿過程や治癒機転を促すときは加朮附湯を試みる。老人虚人の癰疽潰膿後また褥瘡などには十全大補湯加附子とする。

(ニ) 瘀血疼痛や月経痛に桂枝茯苓丸や桃核承氣湯で効果不足のときに試みる。疼痛に限らず瘀血証なら何によらず試みる。

本論文の要旨は第52回日本東洋医学会学術総会で発表した。

謝辞 東京駒込の松田邦夫先生には、患者の治療から原稿の推敲に至るまで、常に励ましとヒントをいただいた。ここに感謝します。

文献

1) 曲直瀬道三：医療衆方規矩，近世漢方医書集成，

- 5, 123, 名著出版 (1985)
- 2) 百々漢陰：梧竹樓方函口訣, 123, 燎原書店 (1976)
- 3) 百々漢陰：同上, 151, 同上 (1976)
- 4) 浅井貞庵：方彙口訣, 近世漢方医学書集成, 78 (2), 2, 名著出版 (1981)
- 5) 王肯堂：證治準繩, (2)類方, 717, 上海科学技术出版社 (1984)
- 6) 浅田宗伯：勿誤藥室方函口訣, 近世漢方医書集成, 96, 28, 名著出版 (1982)
- 7) 津田玄仙：療治茶談, 同上, 72(1), 140-142, 同上 (1983)
- 8) 浅田宗伯：勿誤藥室方函口訣, 同上, 96, 15-16, 同上 (1982)
- 9) 浅田宗伯：勿誤藥室方函口訣, 同上, 96, 205-206, 同上 (1982)
- 10) 尾台榕堂：類聚方広義, 同上, 57, 151-152, 同上 (1980)
- 11) 浅田宗伯：勿誤藥室方函口訣, 同上, 96, 147-148, 同上 (1982)
- 12) 浅田宗伯：勿誤藥室方函口訣, 同上, 96, 115-116, 同上 (1982)
- 13) 大塚敬節：『千金方』に見る附子の用法, 大塚敬節著作集, 7, 266-268, 春陽堂 (1982)
- 14) 岡西為人：本草概説, 22-30, 創元社 (1977)
- 15) 李時珍：本草綱目, 4, 34-35, 商務印書館 (香港) 有限公司 (1995)
- 16) 津田玄仙：療治經驗筆記, 近世漢方医書集成, 72 (2) 212-213, 名著出版 (1983)
- 17) 湯本求真：附子・烏頭の醫治効用, 皇漢医学, 上卷, 141-142, 燎原書店 (1989)
- 18) 大塚敬節：補中益氣湯加附子で十数年来の病気を忘れた患者, 大塚敬節著作集, 5, 27-29, 春陽堂 (1982)